

### 1. 歴史

わが国のウナギ養殖は明治 12 年に、服部倉治郎が東京深川千田新田に 2 h a の養殖池を作ってうなぎの養殖を試みたのが最初とされている。その後、東海地方（浜名湖）を中心に露地池での養殖が行われ、昭和 47 年頃にビニールハウス方式が考案され、成長が早く、魚病にも強いことから、この方式（ハウス加湿式）が主流となった。

また、えさも生餌から配合飼料に転換された。ハウス加湿式と配合飼料への転換により、生産地も関西以西の太平洋側各地に広がり、特に九州、四国で産地が形成されている。

ウナギの人工孵化は昭和 48 年に北海道大学において初めて成功し、平成 15 年には三重県の水産総合研究センター養殖研究所は完全養殖に世界で初めて成功したと発表した。しかし人工孵化と養殖技術はいまだ研究中で、養殖種苗となるシラスウナギを海岸で捕獲し、成魚になるまで養殖する方法がいまだ主流となっている。

#### メモ

鰻業は、他の養殖と違い、完全養殖技術が確立されていなく、鰻の子供であるシラスウナギを捕獲し、育てるのが特徴である。日本にやってくるうなぎの産卵場所は北緯 15 度、東経 141 - 143 度前後の海底 4,000m 級の海山と推定されている。(北海道から真南に 3,000 キロ程度のエリア、マリアナ諸島近海)。黒潮に乗って日本沿岸にたどり着いた鰻の子ども、シラスウナギを大量に漁獲してこれを育てる。養殖方法は、台湾と中国南部の広東省では池を掘っただけの露地養殖、日本と中国の福建省はハウス養殖（ハウス加湿式）が主流である。ハウス養殖は、ボイラーをたいて水温を約 30 に保っており、成長を早めることができる。

### 2. 現状

日本の養殖鰻生産量は、最盛期には約 4 万トンありましたが、ここ数年は、約 2 万 1 千トンで推移している。

一方、外国の主な鰻生産国は、中国、台湾（特に中国からの輸入量の増加は著しい）で、平成 12 年には両国合わせて 13 万トン以上の輸入がありました。

平成 16 年の日本の生産量は約 2 万 1 千トン、中国、台湾からの輸入量が約 7 万 8 千トンでその合計は 10 万 7 千トンで、日本の鰻生産量のシェアは約 20% となっている。

日本の鰻消費量に係る統計はありませんが、日本の生産量と外国からの輸入量の合計を日本における鰻の年間消費量と推定している。このように、輸入量、国内生産量、消費量ともに低下していることが分かる。

国内生産半減の理由は、次の 3 点に要約される。

シラス漁獲量の減少（20 年前約 100 トンあったのが、最近では 20 トン台で推移）とシラス価格の高騰による経営採算悪化している。

安い中国産輸入の急増し、約 80% を占めている。

経済のグローバル化とともにウナギが国際商品となり、人件費の高い我が国養鰻業の比較優位性の喪失している。

### 3. トピックス

平成 17 年、業務用が 95% を占めるうなぎの蒲焼は中国産に合成抗菌剤が検出されて輸入量が前年比 6 7 % と激減した。平成 18 年も落ち込みが続き、今後安全な輸入品が供給されるまで、市場の回復は厳しいと予測されている。